

# 秋の養分転流促進への取組について ①

R8.アグリ技研(株)

1.目的 春芽増収のために収穫後半（10月上旬）から光合成精製副産物（糖）を沢山貯蔵根に転流蓄積する管理を目的とする。

＊ここ数年の夏場の猛暑や暖秋傾向で従来の後半の養分転流と比較したら光合成にに寄り糖を貯蔵根に蓄える期間や量は少なくなって来ることにより春芽の低収要因の一つだと思われます。  
後半の気温は若茎の萌芽延長にもなって来て糖の浪費とも言えると思います。

## 2.光合成条件

糖を運ぶには茎葉で光合成を活発化させ若茎（草勢）や地下部貯蔵根の働きを確保する。（茎葉維持・吸収根充実

①日照、CO<sub>2</sub>、温度、水分を適正に保ち光合成速度を高める。

☆ ②水分と養分を切らさずに水分ストレスや肥料（N）欠乏は光合成を低下させる。

③葉面積を確保する。（緑の茎葉の維持）

光合成活発化には後半の茎葉維持や  
根域の充実は絶対条件

## 3.新栽培管理のポイント

①光合成には、光は大切ですからビニールの汚れている場合はクリーニング（水洗洗浄）をしましょう

＊ 9月の秋雨時にハウスの上部だけでも布等で洗浄することで春芽の収量は2～30%増加も見込めます。

②高温であっても10月上・中旬で灌水を控え若茎萌芽抑制を図る。（萌芽は成長する）

「10月上旬から5～7日置きに灌水に切り替え11月中旬以降は3～5日置きに十分な灌水処理する」

③地上部の養分を貯蔵根に貯めて遅くまで秋芽の萌芽に使用させない制限を行う。（若茎萌芽の刈取り整理をする）

「養分に貯蔵根に蓄え、若茎の消費を抑制して春芽の備える」

④水を抑制するので、十分な防除なり施肥は的確にしましょう。（乾燥気味で推移する）

「根域充実のために後半のアミクエの灌水は定期的に処理する」

- ⑤ 光合成の活発化を図るために茎葉草勢の維持、コラーゲンラボの葉面散布や防除は的確にしましょう。
- ⑥ 気温の低下と養分転流促進でPKゴー2000倍を3～5回葉面散布又は500gを（茎葉黄化迄）灌水処理をします。

光合成速度を高めて貯蔵根に沢山のデンプン（糖）を蓄積して地上部刈取り前の貯蔵根糖度を20～25度前後まで高くすることで春芽の増収を図る。